

大阪・池島・福万寺遺跡

1 所在地 大阪府東大阪市池島町・八尾市福万寺町ほか

2 調査期間 一・二一九九七年(平9)五月～一九九九年三月
三 一九九八年(平10)六月～一九九九年一〇月

3 発掘機関 (財)大阪府文化財調査研究センター

4 調査担当者 一 岡本茂史・市村慎太郎・清水 哲
二 岡戸哲紀・中尾智行・福田和浩
三 川瀬貴子・亀井 聡・岸本広樹

5 遺跡の種類 水田跡・(住居址)

6 遺跡の年代 縄文時代晩期～近世



(大阪東南部)

7 遺跡及び木簡出土遺構の概要

本調査は、恩智川治水緑地建設に伴うものである。遺跡は旧大和川の形成する沖積低地である河内平野の東南部に位置する。本遺跡は、弥生時代前期から現代までの水田耕作地

であり、調査においても約三〇の水田遺構面を確認している。古代から現代にかけての条里型水田が顕著にみられ、中世以降は島畠と呼ばれる浮島状の畑地が形成されるなど、当地周辺の農業発達史を考える上で貴重な資料となっている。

今回報告する木簡は、一九九七年度以降に調査を行なった、その七～九調査区より出土したものである。それぞれ出土した遺構面は異なるものの、いずれも中世に属する水田面や、これを被覆する洪水砂層よりみつかったている。

一、「その七調査区」では、中世後半と考えられる層中より卒塔婆が一点出土した。なお、放射線炭素年代測定では一四〇五～一四五五年という結果が得られている。

二、「その八調査区」では、六枚の塔婆を連ねたものが、中世と考えられる条里水田面を被覆する洪水砂下部から出土した。

三、「その九調査区」では三点の木簡がみつかったっており、(3)は中世末頃、(4)(5)は一四世紀頃の各耕作土層中より出土した。

8 木簡の釈文・内容

一 その七調査区

(1) ・「梵字」

・「梵字カ」

489×51×5 061

表・裏とも墨書の残存は極めて悪く、肉眼でわずかに梵字が観察

できる程度であった。形状は五輪塔形で、下部にむかい矢板状に細く、薄くなる。なお、風輪部と地輪部の一部を欠く。

表面は、五輪の各輪に胎藏五大の種子である「**阿彌多婆**」が書かれていると推定される。その下にも、文字が続くことが観察できるが、解読不可能である。裏面も、上半部に梵字と思われる何らかの文字が書かれていることはかろうじてわかるが、解読は不可能である。

二 その八調査区

(1) 「梵字」 奉為□□^{〔形明カ〕}靈頓證^{〔也カ〕}并□□^{〔二枚目〕}

「梵字」 今世後世能引導 「二枚目」

「梵字」 無仏世界度衆生 「三枚目」

「梵字」 入諸地獄令離苦 「四枚目」

「梵字」 毎日晨朝入諸定 「五枚目」

「梵字」 文明十三年二月十四日 「六枚目」

(横木・裏面にも梵字あり)
340-350×32-38×4-6 061

塔婆が出土したのは中世と考えられる条里水田面で、厚い洪水砂に覆われて遺構の検出状況は良好である。塔婆は遺構面に貼り付くように洪水砂の底部から出土した。六枚の塔婆が二本の横木によっ

て束ねられ、表を下にして埋没していた。表裏面と横木に墨書が認められる。

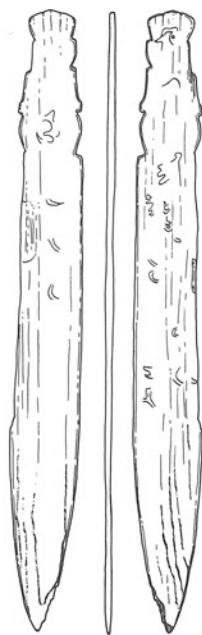
表面の墨書の残りはよく、六枚すべての上部に胎藏界大日真言の「**阿彌多婆**」(ケン・ウン・ラ・ビ・ア)が書かれており、その下にはそれぞれ違った文言が続く。右端の塔婆には戒名が、左端の塔婆には文明一三年(一四八二)の年号が記されている。それに挟まれた四本の塔婆には「延命地藏經」が書かれている。延命地藏經は鎌倉時代頃に成立した和製の偽經とされているが、地藏信仰の盛行に伴って広く用いられたといわれる。本来の經は「毎日」から始まって「引導」へと続くものであるが、当例では逆並びになっている。なお、この延命地藏經を使った例は岡山県百間川米田遺跡の板塔婆にも見られる(建設省岡山河川工事事務所・岡山県教育委員会『百間川米田遺跡』三(一九八九年))。

裏面には識大の「**善**(バン)」を始めとして、「**善**(ボロン・ドバン)」以下六字ほどの梵字が書かれているようであるが判読は難しい。また、上段の横木の表面には地藏菩薩の種子「**阿**(カ)」が六字、下段の横木の表面には阿弥陀如来の種子「**弥**(キリーク)」が四字書かれている。これらは裏面にも同様のものが書かれていた可能性があるが、状態が悪く確認できなかった。

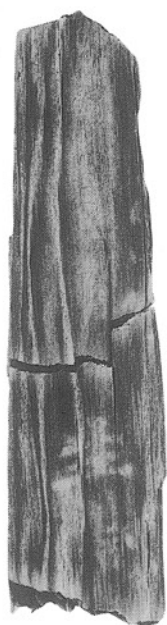
これらの塔婆は、真言宗などで行なわれる「流れ灌頂」に用いる塔婆と考えられる。流れ灌頂は小川などの清流に塔婆を立てる供養



二(1)



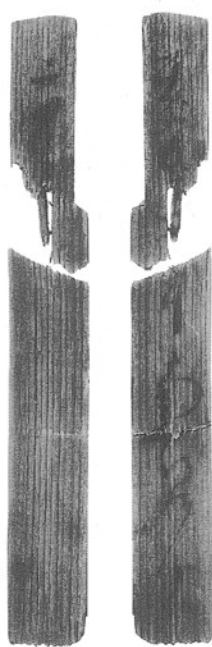
一(1)



三(3)



三(2)



三(1)

法で、主に妊産婦などの死亡や水死者の為に行なわれた。平安末から鎌倉時代始め頃に始まったものと考えられ、庶民の間で盛行したが、近代になって廃れた。今でも高野山奥の院では見ることができ。本来はひときわ大きい塔婆一本が中央に加わり、七本の塔婆を用いる形になるが、当例では洪水で流された際に大塔婆が失われたものと考えられる。上段の横木中央に大塔婆用の木釘が残っている。

三 その九調査区

- (1) ・「    南    」
〔ムアミカ〕
・「」
(141)×18×2 019
- (2) 「    ×
〔生滅カ〕
(186)×35×4 061
- (3)                                          

(1)は短冊形を呈する木簡である。上端は加工痕がみられ、原形をとどめているが、下端は欠損している。表裏面に墨書が認められ、表面には金剛界大日真言を示す梵字と、経文と思われる墨書がみられる。裏面は、上端付近に大日如来の種子を示す梵字が一字のみ記されている。

(2)は上半が五輪塔形を呈する塔婆の一部であり、下半の大部分を欠損している。文字部分の塗膜は完全にとんでいたが、風化によって文字部分のみが凸状に残存していたため、木質部分に残る凹凸か

ら文字を判読した。胎藏界大日真言を示す梵字のうち、末尾一字が欠損しているものと思われる。裏面も同様に、赤外線写真から文字の存在した可能性が考えられるものの、詳細は不明である。

(3)は(2)と同一地点より出土した木簡である。上端は山型に加工しており、下半を欠損している。片面に前述の墨書が認められる。木下密運氏によると、経文の一部「諸行無常 是生滅法 生滅々已 寂滅為楽」を墨書した木簡ではないかとのことである。本資料では「生滅」の部分のみが、かろうじて認められる。同様の資料の中には表裏半偈ずつ記載するものもあるとのことから、本例は裏面の墨書のみが確認されたものと考えられる。

釈読にあたっては木下密運氏（奈良大学・千手寺）のご教示を得た。

(一) 市村慎太郎、二 中尾智行、三 亀井 聡